

[076] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10189>

出版情報：語文研究. 76, 1993-11-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

今井源衛著

『紫林残照 続国文学やぶにらみ』

本書は書名の副題にあるとおり、旧著『国文学やぶにらみ』（昭和五十六年五月 和泉書院）の続編というべく、これまでの論文集に収められなかった書評以外の比較的短篇の論稿を集めた一冊である。全体は、次の四章三十八編より成る。

第一章 国文学研究の現状

人文科学の危機／本は目玉商品ではない？／大学における文学研究と教育、雑感／伝記研究というもの——文学研究者の立場から／日本古典文学叢書のあれこれ／文献・資料との対応

第二章 王朝文学

古典文学における人物造形の方法／日本古典文学の表現／王朝物語の男と女／業平伝雑考／白楽天の自嘲詩と平安文学／「幻の大和物語」／『大和物語鈔』のこと／流出した島原松平文庫旧蔵本／榎寺／菅原道真の配所——『本朝文粹』とのつきあい

第三章 源氏物語

光源氏像／源氏物語をめぐって／源氏物語と現代／源氏物語の注釈書——河海抄のこと——「あるやうあらむとおぼゆかし」（常夏巻）の意味／紫式部の謎／紫式部と藤原道長／『紫式部』を書いたころ／源氏物語との五十年

第四章 羊の歩み

母の思い出／四日市のこと／敗戦前後／進学生諸君へ／清泉の皆さまへ／二年半の思い出／研究室のあれこれの事／中国訪問／退官の辞／手鑑調査の思い出／ソウルの日本古典文学書／ソウルでの源氏物語講読／和書採訪の意味するもの

跋文で著者が述べているとおり、講演の筆記録、新聞のコラム、月報類掲載の短篇、あるいは随筆、評論ふうのものなど、論稿の種類は多岐にわたるが、通常の学術論文とは趣を異にし、いずれも親しみやすい文章で綴られている。就中、第二章、第三章には著者の王朝文学研究、および源氏物語研究に関する深い造詣が示されているけれども、一般の読者もおおいに興味関心をひかれる分かりやすい内容となっている。

（平成五年十月 和泉書院 四六判 三四四頁 二八〇〇円）

工藤重矩著

『平安朝律令社会の文学』

平安時代においては、漢詩や和歌に携わる者も、階層社会の一員として生きていた。だが、この事実は、従来の平安文学論において、度外視されがちであったように思われる。そこで、「文学的営為を平安時代という時代の生活の中の一部分として捉え」（序章）ることを目指したのが、本書である。内容は次の通り。

序章 平安朝律令社会のなかの詩人と歌人

第一部 官職と文学

藏人所の文学的活動について——宇多・醍醐・村上朝を中心とし

て／延喜六年日本紀竟宴和歌の歌人たち／平安期における
「文人」について／内御書所の文人

第二部 律令社会と歌人

「和歌を業とする者」の系譜——古今集序の意識——「和歌を
業とする者」の系譜——「歌よみ」の資格——貴族文壇の構造
——宇多法皇を例として——河原院の文学的伝統と宇多法皇——
第三部 殿上の歌よみ

藤原兼輔／兼輔と貫之をめぐる二つの贈答歌群／藤原伊衡—
重代の歌人——藤原忠房——歌合判者の資格——平兼盛の出自—
王氏・平氏の説をめぐって——

このように、漢詩や和歌といった平安朝文学の位置を、あくまでも
階層社会の中で相対的に捉えようとした本書は、平安朝文学研究に新
たな視野を開くこととなった。著者のこの一貫した平安朝文学につ
いての捉え方は、夙に和泉古典叢書3『後撰和歌集』の解説及び頭
注にも説かれているところである。

(一九九三年七月 ぺりかん社 A5判 三七四頁 四八〇〇円)

後藤昭雄著

『平安朝漢文文献の研究』

本書は『平安朝漢文学論考』(桜楓社、昭和五十六年)に続く、著
者二冊目の論文集である表題の「文献」という言葉が示すとおり、
前掲書の刊行以降に発表された論文のうち、平安朝漢詩文に関する
新出の文献資料を取り扱ったものを中心に編まれている。まず、全
体の目次を次にあげる。

第一部 僧伝

『延暦僧録』考

『延暦僧録』「淡海居士伝」佚文

金剛寺蔵『円珍和尚伝』 金剛寺蔵 円珍和尚伝 翻刻

第二部 詩作の場と漢詩文

延喜七年大井河御幸詩

『勸学会記』について

安和二年粟田殿尚齒会詩

寛仁二年藤原頼通大饗屏風詩

永承五年北野聖廟法華講詩

北野作文考

第三部 詩文拾遺

佚存平安朝詩注

落書拾遺

〈無名仏教摘句抄〉について

『中右記部類』巻二十八紙背漢詩をめぐって

付篇

金剛寺蔵新葉府注

ここで紹介されている新出資料の中では、天野山金剛寺所蔵の
ものが大きな比重を占めていて、本書の眼目をなす。金剛寺所蔵の文
献資料としては、すでに『注好撰』の影印・翻刻・解説が著者の手
により公刊されているが、『金剛寺蔵注好撰』和泉書院、昭和六十三
年)、ここでは『龍論抄』所引『延暦僧録』、『円珍和尚伝』、〈無名仏
教摘句抄〉、「新葉府」注などが新たに紹介され、それぞれ詳細な分
析がなされている。

また、未紹介の勸修寺家旧蔵『中右記部類』卷二十八紙背漢詩についても取り上げられており、その他『勸学會記』、『安和二年粟田殿尚齒會詩』など、すでに紹介、公刊されてはいるが、解析が十分なものについて厳密な検討が加えられている。そしてこれら新出資料については、本文中にすべて翻刻が付されており、資料性の点でも極めて高い価値があるといえる。

著者が本文中で述べているように、平安朝漢詩文研究において、新資料の紹介は、基礎資料の整備という点で重要な意味を持つ。本書の刊行によって、平安朝漢詩文研究の一層の発展が期待されるところである。

(平成五年六月 吉川弘文館 A5判 三〇〇頁 六八〇〇円)

後藤昭雄著

『平安朝文人志』

本書は、諸雑誌に執筆された平安朝漢文学に関する諸論文に、新しく筆を加えて一冊に纏められたものである。といっても、学術論文にありがちな難解な内容をもつものではなく、文学資料はもとより、史料を駆使しながら、一つ一つの問題に対して新事実を明快に箇切れ良く指摘し、あるいは詩文を丁寧に読解していく。研究者のみならず、一般読者にも広く受け入れられる好書であるといえよう。漢詩文に堪能であった、平安朝の様々な「文人」の姿を考察、解説しながら、そこに共通して見られるのは、時代の様相というものを常に念頭に置きつつ、平安朝漢詩文が文人・貴族社会においていかに広範に浸透していたかを人的側面から見渡そうとする氏の姿

勢である。

収録論文は以下の通りである。

撰閲家の詩人たち

円珍をめぐる文人たち

菅原是善伝逸事

嶋田忠臣論断章

菅原道真の家系をめぐる断章(一)

菅原道真の家系をめぐる断章(二)

菅原道真の詠竹詩

紀長谷雄「延喜以後詩序」私注

坂上——『統浦嶋子伝記』の施注者

宇多系源氏の文人——一条朝文人の動静

大江匡衡——卿相を夢みた人

冒頭の「撰閲家の詩人たち」をはじめとして、「円珍をめぐる文人たち」「宇多系源氏の文人——一条朝文人の動静」などでは殊に、これまでとかく忘れられがちであった、歴史の隅に埋もれていた詩人達を「発掘」し、彼らの詩才に子細に焦点を当てている。

尚、巻末に索引を付す。

(平成五年十一月 吉川弘文館 四六判 二四三頁 二五〇〇円)

田坂憲一著

『源氏物語の人物と構想』

本書は『源氏物語』に対して、作品そのものと享受史という二面から、常に新鮮な問題を提起し続けてきた著者の『源氏物語』とい

う作品そのものを対象とした論を集めて一書と成したものである。都合十七篇の論、分けて三部となし、第一部に著者近年の関心を述べた「政治と人間」論、第二部に著者の研究の出发点を飾った「人物と構想」論、そして第三部にそれら各論のあい間を縫って書かれた小品を、左記のごとくに配す。

I 政治と人間

一 弘徽殿太后試論——源氏物語における政治の季節

二 鬚黒一族と式部卿宮家

三 内大臣光源氏をめぐって——源氏物語における政治の季節

四 頭中将の後半生——源氏物語の政治と人間

五 螢宮をめぐる諸問題

II 人物と構造

六 朝顔の姫君の構想に関する試論——葵巻を中心として

七 漆標巻の構造に関する試論

八 二条東院構想の変遷——明石の君母子の処遇をめぐって

九 源氏物語の「桂の院」について

十 六条院構想の成立に関する試論——四人の女君の人物像をめぐって

十一 玉鬘十帖の結末について——若菜巻への一視点

十二 夕霧巻の構造について——夕霧雲居雁の側面から

十三 花散里像の形成

III 異文・引歌・影響

十四 十六夜の月・二十日の月——源氏物語異文考証

十五 「神無月いつも時雨は」考——源氏物語引歌瞥見

十六 『我身にたどる姫君』の時間構造

十七 『我身にたどる姫君』の年齢表現

——付 年齢・官位・身分一覧——

なお、著者には前述のごとく『源氏物語』研究のもう一本の柱——享受史に関する重厚な業績が備わる。その一端は、すでに『源氏積諸本集』（一九八七年、權歌書房刊）として公刊を見たが、本書の上梓を機に著者の享受史関係論文の集成刊行が一段と待たれる。

（平成五年十月 和泉書院 A5判 三四〇頁 一〇三〇〇円）

幼学の会編

『諸本集成仲文章注解』

平安末期に成立した白居易仮託の教訓書『仲文書』は、今日では、当時の幼学の実態を把握する為の貴重な資料のひとつであると同時に、文芸面においても、唱導や説話、『平家物語』、古辞書といった各方面への影響が確認できる興味深い書物であるが、このたび、本学会員である後藤昭雄氏ら五名のメンバーから構成する「幼学の会」により、はじめての注釈書が刊行された。同会は既に『上野本注千字文注解』（平成元年 和泉書院）を公刊しており、それに続く幼学書注釈の第二冊目ということになる。

さて、本書は、解題・注解編・影印編・語彙索引からなっているが、注解編では正安二年の奥書を持つ西野本を底本とし、諸本の校異を併記する本文に、対句表現を重視した中世の訓みに即して書き下し文を付す。出典考証や語釈は、和漢の典籍を駆使している。さ

らに同編には、諸本や金沢文庫蔵『仲文章要文』に認められる独自本文と『温故知新書』所引『仲文書』語彙一覽を付載、『仲文章』享受の複雑さと幅の広さを窺わせる。

影印編は、底本に採用した西野本をはじめ、静嘉堂文庫本、島原松平文庫本、楊守敬旧蔵本、金沢文庫蔵『仲文章要文』、宮内庁書陵部本の影印を収め、その結果、現存する数少ない伝本の通覧が可能になったことは、今後の研究の一層の進展を促すであろう。なお、本書「あとがき」によれば、現在、同会は源為憲『口遊』を輪読中とのことである。次なる出版が待たれる。

(平成五年十月 勉誠社 A5判 四三七頁 一五〇〇〇円)

中野三敏編

『日本の近世 12 文学と美術の成熟』

本書は、もともと江戸的な文化が充実し成熟していた十八世紀の文芸と美術を、十二人の著者が、それぞれ江戸時代当時の見方に即して「雅」と「俗」の両面から記したものである。

本書は十二章から成り、具体的には、

- 第一章 中野三敏氏の「十八世紀江戸の文化」
- 第二章 久保田啓一氏の「堂上和歌の伝統と文化圏」
- 第三章 井上敏幸氏の「西国大名の文事」
- 第四章 多治比郁夫氏の「詩人の誕生」——幽蘭社・賜杖堂・混沌社社
- 第五章 宮崎修多氏の「大田南畝における雅と俗」
- 第六章 岩田秀行氏の「戯作の二重構造と江戸文化」

第七章 飯倉洋一氏の「奇談から読本へ」

第八章 加藤定彦氏の「都会俳諧の展開——蕉風俳諧とのせめぎあい」

第九章 小林忠氏の「雅俗の呼応——本画と浮世絵」

第十章 水田紀久氏の「唐様の世界」

第十一章 錦織亮介氏の「黄檗派美術の影響」

第十二章 成瀬不二夫氏の「沈南蘋と江戸の写実絵画」

という構成を取っている。

この十二人の著者の内、編者の中野三敏氏、久保田啓一氏、井上敏幸氏、宮崎修多氏、飯倉洋一氏の五名は、九大国語国文学会の会員である。

江戸時代の文化に対しては従来、西鶴・近松・芭蕉に代表される前期の元禄文化と馬琴・三馬・一九に代表される後期の化政文化を最盛期とし、十八世紀を二つの間の過渡期、更には谷間の時期として否定的にとらえる見方がなされてきた。このような近世観が常識としてまかり通るのは、近世を近代の側からのみ見る見方に由来している。編者は、ことあるごとに主張してきた。本書の編集方針にもこの主張は貫かれている。

これまでの常識においては、所謂俗文芸の旗手のみが近世文芸の代表者とされ、雅文芸の担い手は不問に附されてきた。それに対して、本書に収められた諸論は皆近世中期に即した見方から、雅(伝統文化)と俗(新興文化)が共存・融和している諸相を見事に伝えている。編者の主張する、十八世紀こそが近世文化の最盛期であるという考えは、従来の歪みを伴った近世観に挑戦するかのごとくゆるぎなく対峙している。

今後更に、十八世紀を近世の過渡期とする従来の見方を取る人々との間で論議をよぶべき一冊といえよう。

(平成五年五月 中央公論社 五〇六頁 三三〇〇円)

中野三敏他校注

新日本古典文学系84

『寝惚先生文集』 才蔵集 四方のあか

本書は表題三作の他に、『通詩選笑知』『壬戌紀行』『奴風』『南歌集(抄)』の四作品の注釈、及び付録として『狂歌知足振』と『狂歌師細見』を、前者は翻印後者は影印の形で収録する。

大田南畝の著作は、現在完結まであと一卷を残すのみとなった『大田南畝全集』で通覧することができ、こうなると次に待たれるのがそれらの作品の注釈書であろう。この事に関して、中野氏は本書巻末の「解説」の項で、「本巻には及ばずながらとはいうもののその万分の一を示す仕儀にたち至っている。」と述べている。分量に関しては暫く措くとして、本書で取り上げられた作品の内容を見ても、狂詩・狂歌・狂文・紀行文・随筆・漢詩と幅広い分野から採録されており、兎角俗文芸に偏して取り上げられがちであった南畝の作品を本書がいかに全般的に見渡しているかが一目瞭然である。

また、『寝惚先生文集』『通詩選笑知』では、その見返しが当時の漢詩文集の見返しのパロディであることを、両者の影印を並べて指摘しその徹底的なもじりぶりをはつきり示している。こうした点も、当時の俗文芸がもじる対象としての雅文芸があつてのものだと

いう案外忘れられがちな事を読者に再確認させるために有効だと言えよう。

幕臣・儒雅といった本分を守りつつ、その間隙を縫って戯作に遊んで精神の解放を図る南畝のバランス感覚は中野氏が「解説」で繰り返し触れるものであり、南畝の戯作類のあたりしみ・おかしみといったものも、本分をきっちり守った上で生じるものであることは間違いないが、従来は南畝の雅文芸は取り上げられること自体が少なかったうえ、俗文芸を俎上に載せる際も、それを雅文芸との関わりを視野に入れて取り扱った例は少ない。

こうした状況の中での本書の刊行は、南畝作品の本格的注釈の嚆矢というだけにとどまらず、江戸中期の雅俗融和の時代風潮を体現した知識人南畝を全体的に捉える試みとしてまことに歓迎されるものである。

(平成五年七月 A5判 五七〇頁 四〇〇〇円 岩波書店)